

日本における男女共同参画社会の展開(8)
—官学連携による座談会の実践—

Development of gender equal society in Japan Part 8

- practice of round-table talk in cooperation with government and schools-

富川 拓 (聖泉大学)・大東貢生 (佛教大学)

新矢昌昭 (華頂短期大学)・木脇奈智子 (藤女子大学)

TOMIKAWA Taku・OTSUKA Takao・SHINYA Masaaki・KIWAKI Nachiko

(Seisen University) (Bukkyo University) (Kacho Junior College) (Fuji Women's University)

要 旨

本論では、大学生と男女共同参画に関する先行研究を概観した上で、筆者らが彦根市役所と連携して実施した、大学生対象の「男女共同参画座談会」の実践を報告し、意見交換の内容と参加学生の感想をもとに、座談会の成果と課題について分析を行った。

先行研究を概観したところ、キャリア教育の領域の実践に関する研究、ゼミや心理学の授業における実践に関する研究、学生の専門領域に関連したボランティア活動としての実践に関する研究を確認することができた。男女共同参画座談会の分析では、「教育の問題」等の男女共同参画を推進するにあたっての課題や、啓発を目的とした本座談会の成果と課題を学生の語りから明らかにした。

キーワード 男女共同参画、ジェンダー、大学生、彦根市、官学連携

1. 問題の所在

本論は、大学生と男女共同参画、特に男女共同参画の啓発に関する先行研究を概観した上で、筆者らが彦根市役所と連携して実施した、大学生対象の「男女共同参画座談会」の実践を報告し、意見交換の内容と参加学生の感想をもとに、座談会の成果と課題について分析することを目的とする。

筆者らは、これまで地方自治体における男女共同参画政策等に関する実践研究を行って

きた(富川他 2016, 2017, 2019、大東他 2015, 2016, 2017, 2018)。今回取り上げる滋賀県彦根市は、その実践研究において協力をいただいている地方自治体の一つである。

彦根市では、「彦根市男女共同参画計画ひこねかがやきプランⅡ(改訂版)」が2022年に計画期間の満了を迎えるため、現在、「彦根市男女共同参画計画ひこねかがやきプランⅢ(仮称)」の策定作業が進められている(1)。策定に向けて、これまで彦根市では市民や市内企業を対象とした意識調査を実施して男女共同参画の実態把握を目指してきたが、2019年に実施した「男女共同参画社会づくりのための市民意識調査」では、18歳から20歳代の回答率がその他の世代よりも低い結果となった。次世代を担う若者の意見の把握と、回収率の低さからも明らかといえるであろう若者の男女共同参画への関心の薄さが、彦根市の課題の一つとなっている。

本論で取り上げる大学生を対象とした「男女共同参画座談会」は、上述の状況において、筆者らが彦根市役所の男女共同参画担当職員と協働で企画し、彦根市主催で開催した、大学生の意見の集約とともに大学生の啓発を目的とする官学連携の実践である。

2. 先行研究の概観

大学生と男女共同参画、またその啓発に関する先行研究を概観するため、国立情報学研究所の雑誌論文データベース、「CiNii Articles」で、「大学生」「男女共同参画」「ジェンダー平等」「啓発」をキーワードとして、論文検索を行った。

まず「大学生」「男女共同参画」をキーワードとして論文検索を行ったところ、検索結果は77件となった。同様に、「大学生」「ジェンダー平等」では3件、「啓発」「男女共同参画」では21件、「啓発」「ジェンダー平等」では1件という検索結果となった。

大学生を対象として実施された男女共同参画に関する意識調査の分析が多くみられるなか、大学生を対象とした啓発や教育に関する論文をいくつか確認することができた。管見ではあるが、男女共同参画に関する大学生を対象とした啓発や教育に関する分析はそれほど多くない状況にあるようである。

植上一希は、福岡県男女共同参画センターあすばる、福岡大学福岡・東アジア・地域共生研究所との連携のもと、「男女共同参画社会における「自立」を考えるー若者が社会に立ち向かうためにー」というテーマで企画した、学生のキャリア形成支援を目的とする事業についての分析を行っている(植上 2014)。

事業では、外部講師担当の男女共同参画講座や、社会の諸世代・諸階層と意見を交わす機会としてのワークショップが実施された(植上 2014)。植上は参加した学生の感想をもとに、学内講座の効果や意味として「新たな知識の獲得」「社会を構成する行政、NPOなどの観点の獲得」「実践に取り組む人々の経緯や思い、葛藤」を挙げ、同様に、ワークショップの効果や意味として「学生同士で自分たちに関わることを真面目に話し合う」「社会に対して意見を発信していく」「他の世代や社会階層の人々と、こうした社会問題を媒介として交流する場・経験の重要性」を挙げた(植村 2014)。

東洋充は、鹿児島大学の男女共同参画推進センターの取り組みを報告している(東 2013)。東によれば、鹿児島大学の男女共同参画推進センターでは、全学部学生対象の共通教育科目「男女共同参画とキャリアデザイン」の中で、学内の教員による男女共同参画に関する基本的知識に係る講義や教職員によるロールモデル講話、教職員を交えたグループディスカッションを実施し、男女共同参画のあり方について理解を深めさせるとともに、男女共同参画社会実現への積極的な関与を促している(東 2013)。

またこの科目の開講時期に合わせて、附属図書館で国立女性教育会館情報センターの「図書貸出パッケージサービス」による男女共同参画関連図書 200 冊の貸出サービスを実施して受講学生の参考図書としたり、男女共同参画推進センターの活動を紹介したポスター展を開催したりすることにより、男女共同参画に対する意識啓発の機会とした(東 2013)。

深瀬澄・山路崇正は、大学コンソーシアム大阪の若者層男女共同参画啓発事業「若者のためのライフデザイン支援事業」に採択された、大阪経済法科大学の啓発事業の報告を行っている(深瀬・山路 2016)

深瀬らは、学生が所属し日々専門科目を学んでいる学科の学びが意識形成にどのように反映されているかについての分析を行い、法律学科では、性別役割分業について肯定的になりやすく、経済学科の女子は男女共同参画の意識が向上しやすいこと、経営学科では、3学科で唯一、女性の活躍の可能性を信じ、打算なく働くことに価値観をもっており、両性間の意識対立も認められなかったという点では、最も男女共同参画の意識を向上させやすいと結論づけている(深瀬・山路 2016)。

下島裕美・大家まゆみ・稲垣勉は、大学の授業内で男女混合および女性のみで実施した男女共同参画ワールド・カフェの感想の相違と感想の性差について検討を行っていた(下

島他 2018)。下島らは、大学の発達心理学の授業で、男女共同参画ワールド・カフェを実施した際に学生が記入したワークシートの分析を行い、その分析の結果、男女共に性別役割分担意識は「固定的」な意識と、より男女平等の意識とに分かれ、同性だけのグループよりも男女混合グループの方が、男女の相違や共通点が明確になることがわかったとした(下島他 2018)。

元井貴子は、聖母短期大学の2年次のゼミである専門必修科目「特別研究」の履修者が授業の一環として参加した「福島市男女共生セミナー2018～日本国憲法と男女共同参画～」についての報告を行い、セミナーに参加した学生の意識の変化等を分析した。(元井 2019)。分析の結果、男女共同参画に関する用語や問題についての理解が進んだ一方で、イベント参加や自身での活動については積極的な意識を持つまでには至らなかったことがわかった(元井 2019)。

下敷領須美子は、鹿児島大学医学部保健学科のボランティアサークル「ピア☆びあ☆かごしま」のピアカウンセリング・ピアエデュケーションによるデートDV予防の取り組みを報告している(下敷領 2011)。「ピア☆びあ☆かごしま」は、主に高校生を対象とする「ピアエデュケーション」や「ピアカウンセリング」を実施しており、鹿児島県との連携では若者による若者のための相談室である「びあ・すてーしょん」や「高校生ピアサポーター養成講座」等に取り組んでいるとのことであった(下敷領 2011)。

下敷領らは、ピア活動の有効性について述べた上で、今後の課題として「新しい学生の養成」「地域・学校とピア活動を結ぶピアコーディネーターが不可欠であること」「大学からの学生の地域活動支援」「保健・教育行政との連携」を挙げている(下敷領 2011)。

以上、「大学生」「男女共同参画」「ジェンダー平等」「啓発」をキーワードとして論文検索を行い、先行研究を概観した。植上(2014)、東(2013)、深瀬・山路(2016)の報告からは、キャリア教育の領域における男女共同参画に関する啓発、教育の実践とその分析を確認することができた。下島他(2018)、元井(2019)の報告からは、ゼミや心理学の授業における実践とその分析、下敷領(2011)の報告からは学生の専門領域に関連したボランティア活動としての実践とその分析を確認することができた。

3. 彦根市における大学生対象の「男女共同参画座談会」について

本座談会は、筆者らが彦根市役所の男女共同参画担当職員と協働で企画し、大学生の意

見の集約とともに大学生の啓発を目的として開催したものである。参加学生にとっては、間接的にはあるが、彦根市の新規計画策定に関わることのできる実践、学びの機会ともなる。座談会の詳細は、下記の通りである。

彦根市主催 大学生×彦根市 座談会「彦根市の男女共同参画について」

①テーマ 彦根市の男女共同参画 ～過去・現在・未来～

②開催日時 2020年10月28日(水)14時30分開始、16時終了

③開催方法 Zoom(2)を使用した遠隔による意見交換(3)

④参加者

学生：14名(社会学や現代文化を学んでいる学生で、14名全員が女性であった。また14名中6名が中国からの留学生であった。)(4)

コーディネーター：聖泉大学教員 富川拓

彦根市役所：企画振興部企画課女性活躍推進室 I氏、J氏

⑤スケジュール

14:20 Zoom会議室 参加者入室開始

14:30 座談会開始

彦根市男女共同参画ひこねかがやきプランⅢ(素案)の説明等 担当：I氏

14:45 意見交換 担当：富川

自己紹介、彦根市のプランについて、若者を対象とした啓発活動について、本座談会に参加した感想、その他

16:00 座談会終了

参加学生は、事前に配布した「彦根市男女共同参画ひこねかがやきプランⅡ(改定版)」「市民・企業意識調査報告書」「彦根市男女共同参画ひこねかがやきプランⅢ(素案)」等の、彦根市から提供された資料を確認したうえで、座談会に参加した。

4. 結果と考察

男女共同参画座談会における「意見交換」の内容と、参加した学生の「感想」を整理し、

その分析を行う。なお、感想については、座談会の最後にそれぞれが語った感想と、座談会終了後に作成した感想文の内容を併せて分析の対象とした。

4.1. 座談会における意見交換について

①教育について

教育が重要だとの意見が複数出された。それぞれの経験に基づいて、男女共同参画やジェンダーについて学校で学ぶ機会がほぼ無かったことなどが語られた。これらの意見は、男女共同参画、ジェンダーに関する学校教育の充実が急務であることを示唆しているといえるだろう。

A さん:「教育のところで個人的に大事だなと思うところがあります。大学生になるまで、男女の格差、ジェンダー格差の実態について知る機会がほぼ無かったように思っていますよ。例えば、そういう実態について知らないと、例えば幼い時に女性が性被害に遭いやすいだとか、そういう事実を知らないで性被害に遭ってしまうとそれが性被害であるということも認識できないままずっと経験してしまうというところがあると思っています。」

A さん:「大学に入ってから、同級生の男子学生と話をしたときに、衝撃的な話があった。一つは「女性専用車両があるのに、男性専用車両がないのは差別だ」というような男子学生の意見だった。女性に対する性被害が深刻化しているということを知らない、それを知る機会が今までなかったのではと思う。もう一つの衝撃的な話は、DV被害に関する現状報告をしている人に対して、「男性を怒らせるような女性に問題があるのではないか」と言っている方がいた。その方は、DV被害に纏わる根深い問題を知る機会がなかったということだと思う。そういう面で男女格差、ジェンダー格差に関する教育の機会についてすごい大事だなと思います。」

B さん:「中学校の社会の教員免許に取得に励んでいるのですが、その時の男女共同参画社会のことで指導案を実際に作ることが授業であったんですけども、その時に男女共同参画のことを中学校の教科書で見たら、そんなに大きく取り上げられていな

くて、単元の項目の一つみたいなので、あまりこれほんまに問題ということ言われてなくて、この問題についてあまり深く考えなくてもよいという感じなんですよ。実際に、市立の学生ボランティアをしているんですけど、その時に教員が女の子だからとか、男だからとか、線引きをしてるとか、というのがすごくありました。教育の方で、市がしっかりとしてくことは大事だと思います。」

C さん：「ジェンダー関係のこと（授業等）は過去にあまり受けてたことがないので、正直、性暴力の怖さとか全然知らないんで、彦根市の取り組みには賛成だなと思った。」
（括弧内は筆者の補足。以下同様）

社会学関連の学部でも、コースによっては、ジェンダーについて学ぶ機会がほぼないと語りも見られた。

コーディネーター：「このようなこと（男女共同参画、ジェンダーに関すること）は、所属学部（社会学関連の学部）で学ぶ機会が多い印象でしょうか」

A さん：「学部の中の1つのコースではジェンダー系の授業を受ける機会が多いですが、他のコースではジェンダーに関する知識を得る機会がほぼないと思います。（自分自身も）大学までの学校教育の中ではほぼ無かったように思います。受験勉強のことだけ。」

②夫婦別姓について

中国人留学生からは、日本の夫婦別姓が気になるとの意見が出され、夫婦別姓をどのように考えるか、参加者全員に対して質問が投げかけられた。研究職についた場合は別姓のままがよいと思うとの意見が出たが、それ以外は特に参加者から意見は出なかった。

D さん（留学生）：「日本の夫婦別姓が気になる。ほとんどの女性にとって、結婚は姓を変えることを意味している。皆さんに質問したいのですが、結婚したら夫の姓を名乗りますか？」

A さん：「私がこの先、何かの研究職に進むとしたら、それまでの旧姓で書いた論文があって、そこから違う苗字になってこう、違う名義の論文になったとしたら、それまでのキャリア、実績が途絶えてしまうことに繋がると思うので、そういう場合は別姓のままがよいと思います。」

③市民、大学生が何をすればよいのか

大学生や市民が何をすればよいのかわからないとの意見や、男女共同参画は政府や役所の仕事だというイメージがあるとの意見が出された。併せて、具体的にどのような内容の取り組みなのかということをもっと浸透させたほうがよいとの提案もあった。

参加学生は、事前に彦根市の各種資料を確認しているが、このような声は座談会開始前から筆者らに聞こえてきた。男女共同参画の取り組みは、市民との協働で進めるものであるため、市民が関心を持ち、取り組みに参画したいとの思いを持つようになることが重要となる。市民が担うべき取り組みの具体化と、そのイメージをわかりやすく伝える工夫が必要だと思われる。

E さん：「地域について、男女のテーマで変わるの資料を読んでいて良いなと思っていたんですけども、結局、テーマを成し遂げるために、学生とか地域の人が何をすればよいのか、ちょっとあんまり明確になっていないじゃないけど、そこは自分はわからなかったです。」

F さん：「男女共同参画という学校で単語自体は習うが、働く機会などを平等にするというイメージはわかりますが、実際に何をしているのか、自分たちが何をすべきかがイメージできないです。政府や役所の仕事だというイメージが完全についてしまっていると思います。具体的にどういう内容なのかということをもっと浸透させたほうがよいと思いました。」

④啓発について

啓発については、世代ごとに使用するメディアを変えるなどの工夫が必要だとの意見が出された。ツイッター等、SNS での情報発信、マンガ形式での情報発信についての提案が

あった。また、SNSで検索してもらうには、まず興味を持ってもらう必要があるとの指摘があり、そのためには、何か大切なキーワードをハッシュタグにして浸透させる必要があるとの具体的な提案もあった。

大学生だけでなく中高齢者にも SNS 利用者は多いため、マンガ形式での発信も含め、彦根市においても導入に向けた検討が必要となるだろう。

F さん：「啓発については、祖父母世代は回覧板、自分たちの世代は、学校のお便りに載せると見る機会が増えると思います。」

A さん：「男女格差の実態、データを周知していただいて、このような実態があるから、このようなことをしようとしていますよ、というようにしていったらよいと思います。生涯賃金の格差がどれくらいあるだとか。私の身近で思うのは、ツイッターとか SNS で発信している人を結構見かけます。マンガ形式でわかりやすく勉強っぽいことを表現したりとか。わかりやすく勉強になります。」

F さん：「ツイッターとか SNS は自分が興味をもったものしか検索しないので、その前段階でどうやって興味をもってもらうのか、そこらへんから考えないといけないかなと思います。」

G さん：「#KuToo 運動とか、#MeToo 運動って、みんなが興味をもっていなくても知ってもらえているように、何か啓発になるようなハッシュタグを作ったらもっと浸透するんじゃないかなって思っています。ハッシュタグはめっちゃ便利なんで。ポチッと押すだけで、興味がなくても、何だろうって一瞬思うだけでポチッと押したら、そのすべてに繋がるので、ただただ文章だけでやるよりか、何か大切なキーワードみたいな言葉を作って、ハッシュタグにするのがすごく大事なんじゃないかと思っています。」

⑤長時間労働について

長時間労働について、その改善方法が気になるとの意見が出された。就職活動に取り組

む学生にとっては、長時間労働が気になるトピックとなっているようである。

H さん：「長時間労働をどのように改善していくのかが、自分は気になりました。」

以上、意見交換の内容を整理分析したが、「教育の問題」「夫婦別姓」「市民、大学生が何をすればよいのか」「啓発」「長時間労働の問題」等、学生から出された意見は多岐にわたった。今後の彦根市の取り組みにおいても、検討すべき事項として取り上げていく必要があるだろう。

4.2 参加学生の感想について

座談会の最後にそれぞれが語った感想と、座談会終了後の感想文からは、座談会の成果と課題を確認することができた。意見交換の場では、なかなか発言ができなかった学生も、座談会の最後に感想を述べる段階では、それぞれしっかりと発言をすることが出来ていた。

①男女共同参画について学ぶことができた

「男女共同参画についていろいろ勉強になった」「関心を持つことができた」「現状や課題が明確になった」等、学びに関する感想が述べられた。啓発事業としての座談会の成果として捉えることができるだろう。

「これまでこのようなプランを読んだことがありませんでしたので、今日は男女共同参画についていろいろ勉強になりました。」

「座談会を通して、初めて知ることたくさんあったし、自分が今まで興味がなかったことにも少し関心を持つことが出来たこともあったので今回参加できて良かった。」

「今回の座談会を通して、現状とか課題点がすごく明確になって、自分の考え、想像とは違ったところもあって良かったです。」

「大学に入るまで、男女共同参画のことについて深く考える機会がなかったり、認識ができていなかったなので、改めて考えることが出来て良かったです。」

「良かったことは、今のリアルな状況を詳しく知れたこと。例えば、国が市町村に対して男女共同参画を推進するための努力をしなさいと伝えられているが、義務ではない

ことや、学校教育に対する意識の向上、指導や、DV や、電車の車両問題でも被害者も加害者も考える必要があるということ。」

「彦根市のいろいろな政策とか最近の課題などがわかった。」

②いろいろな意見、考えを知ることができた

「他大学の学生の意見を聞き、いろいろな観点があることがわかった」等の感想が述べられていた。複数の大学から参加者を募った成果とってよいだろう。

「他大学の学生の意見をいろいろ聞くことができ、いろいろな観点があることがわかった。」

「違った地域で育った方、違った大学に通ってらっしゃる方の色々な意見や考えが聞けて良かった。違う視点を聞くことが面白かった」

「他校の学生さんの意見を聞けてよかったです。自分の知らないことや、違った意見を聞くことが出来て、新鮮でした。」

「年齢は違えど、女性、大学生という同じ区分に置かれていても、感じ方や意見の方向など変わってくるのだなと感じました。」

③固定観念に縛られている自分に気づいた

自分自身が固定観念に縛られていることに気づいたとの感想がみられた。こちらも啓発事業としての座談会の成果と捉えてよいだろう。

「自分自身も固定観念に縛られていることがわかった。やっぱりこういうのは、小さいころから教育、小学生でも中学生でもこういう授業があったら変わる可能性があると思います。」

④私たちが出来ることを発信しないとイケない

下記の感想からは、今後、自分達で何かしらの活動をしなければならない思いに至ったことが確認できる。座談会の成果と捉えてよいだろう。

「今回、男女共同参画のことについて、今までなんとなく知ってるくらいだったんですけど、こういう機会を得た私たちが出来ることを発信していかないといけないのかなって、思いました。」

⑤啓発の難しさ、皆で理解していくことの大切さを知った

啓発の難しさとともに、皆で理解をしていくことの大切さを知ったとの感想がみられた。

「啓発や市民の人たちに理解してもらうことがとても、そこが難しいんだなと思って、私自身もジェンダーについて悩んだこととかを友達とかに話したりとか、周りの人たちに話したりするときに、聞いてくれる人もいれば、ただただ聞き流す人もいるし、特にこれからこういう取り組みを SNS であげることによってすごく意味もあると言ったけど、その反面、直接的な人と違って、匿名で攻撃する人も出てくると思うので、そういうことにもすごく気を付けて、ちゃんと皆で理解していくことが大切なんだなって感じました。」

「市の長期的な取り組みとして男女共同参画に向けて取り組んでおられる市があるってことはすごい素敵なことだと思うんですけど、大多数の人というか、広い層の人に向けて発信することって、すごい大変なことなんだなって思った。」

「それをどうやって社会に浸透させいくかはすごく難しいと思うので、市役所の方もそうですし、市民ひとりひとりも意識を改善したほうがよいと思いました。」

⑥男女共同参画に関する具体的な意見、要望

「家庭内での男女共同参画について考えていく必要がある」「男女共同参画という言葉の問題について」「留学生と外国人に対する支援が知りたい」といった具体的な意見や要望が感想の中でも述べられていた。

「今回参加させていただいて、いろんなプランとか計画があるということを知って、これから自分がどういったところに意識しなくちゃいけないのかっていうのもわかったりして、また子どもとか、私たちが持っている価値観とかって学校とかの教育現場

で教えてもらって養われてたりするものと、家庭内でご両親の言動とかをみて、こういうものなんだっていうのを価値観が養われたりすることもあるので、教育現場だけじゃなくて、家庭内でのそういった男女のことについても考えていく必要もあるのかなと思いました。」

「ちょっと個人的なマイノリティな意見かもしれないんですけど、男女共同参画っていう言葉を聞いたら、男性でも女性でもない人がいないことにされているんじゃないか、っていうことが個人的にひっかかってしまうんですけど、でも大多数の人に対してわかりやすい表現を使おうと思ったらそういう表現をいろいろ工夫しないとイケないところもあるんだろうなと思います。」

「留学生と外国人に対する支援を知りたいです。」(留学生の感想)

⑦彦根市のプランや取り組み姿勢等に関する肯定的な感想

「課題を分析し、目標を立てている良いプランだと思った」「市職員の方の考えを知ることが出来て良かった」「自分の地元よりも彦根市の方が男女共同参画についてしっかりと考えているのでうらやましいと思った」「男女共同参画に取り組んでいる彦根市は就職先候補として魅力的」といった彦根市のプランや取り組み姿勢等に関する肯定的な感想が述べられていた。

「彦根市について、多くの課題と今後の目標を出して良いプランだと思いました。」

「男女平等について、市役所の方が課題点を挙げて、取り組みを行おうとしていることはすごく素晴らしいなと思った」

「市役所の方とかとこうやって、このようなことを知るとか機会がないので、とてもよかった。彦根市がちゃんとやっているのがうらやましいと思った。自分の住んでいる市が男女共同参画についてきっちりやっているというイメージがないので、彦根市が男女共同参画についてちゃんと市が考えているよって出していってくれているのはすごい、正直うらやましいなというのがありました。」

「中国はこのような直接政府の方とか市役所の方と交流する機会が少ないです。今回の取り組みは本当に珍しいと思います。」(留学生の感想)

「これから社会人になっていくので、そういう取り組みをしている市とかは、すごく魅力的に感じられて、Uターンとか、就職先の候補となって魅力的に思えて、そういう候補になったりとかするのかなって思えて、彦根市の取り組んでらっしゃるこういうことをアピールしていけば、私たち学生にすごい魅力的に感じるのかなっていう、思いました。」

⑧座談会で地域への関心を高めることができる。自分の地元についても考えてみようと思った

「座談会で大学生の地域に対する関心を高めることができる」「自分の地元についても考えようと思った」との感想がみられた。

「若い大学生に地域に対して自分の意見を出させることは、大学生の地域に対する関心を高めることができるし、地域の今後の発展にも役立つと思います。」

「自分の住んでいる地域の人と一つのプロジェクトを通して繋がることができ、少し幸せな気持ちになりました。地元ではない地域との関わりも新鮮だったし、地元についても考えてみようと思えました。」

「中国で自分の住んでいた地域でも、もっとこういう形を通して、若者の意見をたくさん聞けばよいのでは、と思いました。」(留学生の感想)

「私は地方から来ているので、他の自治体がどのような取り組み・目標を持って計画しているのか、それが結果としてどう反映しているのかなどの現状を知れたことは、これから地元に戻った際や働き始めた際の一つの着眼点にもなると思いました。」

⑨座談会の課題

「もっと単語や言葉を勉強すればよかった。自分で考えられるようになりたい」「専門用語等が出てきて話が分かりづらい部分があった」「うまく発言することができなかった」といった感想からは、座談会の課題を見て取ることができる。

「もっと取り組みで使われていた単語や言葉を勉強すれば良かったなと思いました。書いてあることだけでなく、深く広く自分で考えられるようになりたいです。」

「仕方の無いことだとは思いますが、所々専門用語などが出てきて、話が分かりづらい部分がありました。」

「自分自身のことであるが、なかなか発言するタイミングをつかむのが難しく、時間も限られていたので、聞きたいことがすべて聞くことができなかった。かなり後悔している。」

「私自身のことですが、全体に向けて意見を求められたときに上手く発言ができなかったことが反省点として挙げられます。」

「私も何か役に立てるアイデアがあったらいいなあと思いますが、日本語でちゃんと伝わるのかどうか心配して、緊張して結局何も言わずに終わりました。でも、参加できてよかったと思います。」(留学生の感想)

⑩遠隔実施 (Zoom での実施) について

遠隔実施については、「あまり緊張しなかった」といった肯定的な感想と、「対面の方が意見が言いやすい」といった否定的な感想の両方が述べられていた。

「コロナの状況で集まるのが難しくても、参加でき、遠い場所にいる人も参加できたことは良かったのではないかと思います。」

「直接での対面でなかったおかげか、いくらか緊張はマシだったと思います。」

「Zoom で実施すると、あまり緊張しないです。」

「良い意味で緊張しなかった」

「学校へ行く時間と料金を節約できます。自宅で話す場合は、コロナに感染するリスクを減らすことができます。」

「顔が見れて実際に話し合いができた方がやっぱり次々と意見が言えるなと思った」

「Web でしたせいか、お互い発言していいか迷い、遠慮している節があった気がします。どんどん意見を出し合うのなら、やはり対面の方がやりやすいのではないかと思います。」

「場所によってハウリングや通信状況が悪くなってしまったので、貴重な意見が聞けなかったりするの残念だなと思いました。」

以上、学生の感想からは「男女共同参画について学ぶことができた」「いろいろな意見、考えを知ることができた」「固定観念に縛られている自分に気づいた」「私たちが出来ることを発信しないといけない」「啓発の難しさ、皆で理解していくことの大切さを知った」「男女共同参画に関する具体的な意見、要望」といった学び、気づき等を確認することができた。啓発を目的とした本座談会の成果と考えることができよう。

また、「良いプランだと思った」「彦根市がうらやましい」といった感想や、「座談会で地域への関心を高めることができる」「自分の地元についても考えてみようと思った」との感想からは、本座談会が男女共同参画だけでなく、地域について学び、彦根市や自分の地元に関心を持つきっかけになっていたこともわかる。

「もっと単語や言葉を勉強すればよかった。自分で考えられるようになりたい」「専門用語等が出てきて話が分かりづらい部分があった」「うまく発言することができなかった」といった感想からは、本座談会の課題を見て取ることができる。これまで男女共同参画やジェンダーについて学ぶ機会が無かった(少なかった)学生に対しては、資料の提供だけでなく、教員や市役所の担当者による事前学習等の実施も必要だったと考えられる。学生がより発言しやすくなるような工夫や配慮を検討することも含めて、今後の課題としたい。

遠隔実施(Zoomでの実施)については、肯定的、否定的な感想を確認することができた。今後は、参加学生の状況を見極め、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染リスクを避けつつ、遠隔実施と対面実施を効果的に使い分けていく必要があるだろう。

5. まとめ

以上、本論では大学生と男女共同参画、特に男女共同参画の啓発に関する先行研究を概観した上で、筆者らが彦根市役所と連携して実施した、大学生対象の「男女共同参画座談会」の実践を報告し、意見交換の内容と参加学生の感想をもとに、座談会の成果と課題について分析した。

先行研究を概観したところ、キャリア教育の領域の実践に関する研究、ゼミや心理学の授業における実践に関する研究、学生の専門領域に関連したボランティア活動としての実践に関する研究を確認することができた。本座談会の参加者の語りから、男女共同参画やジェンダーについて学ぶ機会が無い(少ない)現状が確認できたため、キャリア教育やゼ

ミなどの授業、ボランティア活動に加えて、大学の一般教養科目でジェンダー関連の科目を開講するなど、一層の対応が必要であると考えます。

大学生対象の「男女共同参画座談会」の意見交換の内容の分析からは、「教育の問題」「夫婦別姓」「市民、大学生が何をすればよいのか」「啓発」「長時間労働の問題」等の男女共同参画を推進するにあたっての課題を確認することができた。学生の感想の分析からは、本座談会の成果と捉えることのできる学生の学びや気づきに加え、本座談会の課題や、遠隔実施のメリット、デメリットなどを確認することができた。

今回の座談会では、社会学や現代文化を学び、すでにある程度男女共同参画やジェンダーに関心を持っていると思われる学生の参加が中心となったが、関心を持っていない学生に対してこそ、本座談会のような啓発の機会が必要になるだろう。男女共同参画やジェンダーに関心を持っていない学生に対するアプローチについては、今後の検討課題としたい。

また、本論では学生の語りから座談会の成果と課題についての分析を行ったが、市役所や市役所の担当者にとっての座談会の成果と課題については分析することができなかった。この点についても今後の課題としたい。

注

1. 筆者の一人である富川は、彦根市の男女共同参画審議会の会長として策定作業に取り組んでいる。
2. Zoom は、Zoom Video Communications が提供する web 会議室システムである。
Zoom Video Communications のホームページ <https://zoom.us/meetings>
3. 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染リスクを避けるため、打ち合わせを含めて、座談会はすべて遠隔で実施した。
4. 参加学生は、すべて筆者らの所属する大学・短期大学の学生である。彦根市内の大学から参加した 8 名は、ゼミの授業の一環として、滋賀県外の大学・短期大学から参加した 6 名は、課題活動として参加した。

参考文献

1. 青木幸子, 2010, 「教育カルタ」の教材としての汎用性:—大学生と中学生のジェンダー意識の分析—『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集 53(0)』, p.11.
2. 植上一希, 2014, 「大学生に対するキャリア形成支援のあり方の検討: 福岡県男女共同参画センターあすばるとの連携事業を題材に(大衆化した大学における学生の就業意識とキャリア形成支援)--(大学生の社会認識の契機をつくるためのキャリア教育のあり方)』『福岡大学研究部論集. A, 人文科学編 13(3)』, pp.23-31.
3. 大東貢生・木脇奈智子・新矢昌昭・富川拓, 2015, 「日本における男女共同参画社会の展開(1)A市における女性の働きやすさ調査から」『社会学部論集(61)』, pp.77-85.
4. 大東貢生・木脇奈智子・新矢昌昭・富川拓, 2016, 「日本における男女共同参画社会の展開(2)A市における意識調査の分析から」『社会学部論集(63)』, pp.37-54.
5. 大東貢生・木脇奈智子・新矢昌昭・富川拓, 2017, 「日本における男女共同参画社会の展開(3)A市における事業所調査の分析から」『社会学部論集(64)』, pp.67-81.
6. 大東貢生・木脇奈智子・新矢昌昭・富川拓, 2018, 「日本における男女共同参画社会の展開(6)A市における「女性の働きやすさ指標」の分析から」『社会学部論集(67)』, pp.47-63.
7. 下敷領須美子, 2011, 「鹿児島大学の男女共同参画 デートDV 予防に向けた「ピア☆ぴあ☆かごしま」の活動」『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報(8)』, pp.46-56.
8. 下島裕美・大家まゆみ・稲垣勉, 2018, 「男女共同参画社会を実現する大学のキャリア教育: ワールド・カフェによる大学生の“主体的・対話的で深い学び”を育む試み」『教職・学芸員課程研究(1)』, pp.13-23.
9. 富川拓・木脇奈智子・大東貢生・新矢昌昭, 2016, 「日本における男女共同参画社会の展開(5)米原市における男女共同参画政策の変遷」『聖泉論叢(24)』, pp.59-64.
10. 富川拓・木脇奈智子・大東貢生・新矢昌昭, 2017, 「日本における男女共同参画社会の展開(4)彦根市における男女共同参画政策の変遷」『佛大社会学(41)』, pp.43-48.
11. 富川拓・新矢昌昭・木脇奈智子・大東貢生, 2019, 「日本における男女共同参画社会の展開(7)愛荘町における男女共同参画政策の変遷」『佛大社会学』(43), pp.58-62.
12. 富永貴公・池谷美衣子, 2017, 「男女共同参画関連施設の啓発事業を「教育化」する意義」『都留文科大研究紀要 85』, pp.127-144.
13. 東洋充, 2013, 「鹿児島大学男女共同参画の活動最前線: 一人ひとりが伸びやかに自

分らしく輝く大学をめざして」『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報(10)』, pp.39-51.

14. 彦根市, 2020, 『男女共同参画社会づくりのための市民・企業意識調査報告書』

15. 深瀬澄・山路崇正, 2016, 「大学における学びが若者への男女共同参画啓発に及ぼす効果の測定:(大阪市受託)大学コンソーシアム大阪(若者層男女共同参画啓発事業)「若者のためのライフデザイン支援事業」事業実践報告書」『大阪経済法科大学地域総合研究所紀要(8)』, pp.91-110.

16. 元井貴子, 2019, 「市民向けセミナーの参加と女子大学生の意識:福島市の男女共同参画イベント参加による学び」『桜の聖母短期大学紀要(43)』, pp.179-183.

付記

1. 資料をご提供いただいた彦根市担当部局に感謝の意を表したい。
2. 本研究は、聖泉大学研究倫理規程を遵守し実施した。
3. 本研究は、科学研究費助成(18K11908)による研究成果の一部である。

